

AQUA

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場
 こんこんと水が濁るようにアートも濁めども尽きない希望が湧いてくる
 水はわたしたちになくてはならないもの「AQUA」が誕生する

2014年1月発行 35号 すどう美術館
 〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
 TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
 info@sudoh-art.com
 http://www.sudoh-art.com

新しい年を迎えて

二〇一三年も過ぎ去つていき
 ました。しかし、今年もあつた
 思つた通り、一年も充実した
 館内の展示も、前年の「若き
 ちからの展覧会」で、その受
 人間的な期間であつた、その
 いかなる期待も裏切らない展
 だ。その評価を一つ、楽しみ
 に。館外活動は、柱となる、
 大きなプロジェクトの実行、
 で。手廻り、昨日、今日、
 第2回「西湘地区アーティスト
 インレジデンス」が実施でき
 ました。前年同様、多くの画
 ティストや多くのアーティスト
 も。たとえ、協賛者、後者、
 遂行できたこと、協力者、
 謝意を表さず、後者、協力
 術の活動に取組んでいく、美
 を。新活動に、アート、美
 コレクション展、アート、美
 た。三回目を迎える、アート、
 フアウゼルの展覧会、アート、
 高。館外活動は、アート、美
 き。館外活動は、アート、美
 県。大槌町にお伺い、アート、
 が。作品を、アート、美
 の。作品を、アート、美
 と。作品を、アート、美
 会。作品を、アート、美
 思。作品を、アート、美
 続。作品を、アート、美
 けて。作品を、アート、美
 続。作品を、アート、美

すどう美術館館長 須藤 一郎

ARIO 2 所感

小田原市文化政策課 白政晶子

2013年10月、第2回目の「西湘地区アーティストインレジデンス」が、すどう美術館主催、小田原市の共催で行われた。小田原市は施設の提供や広報面で協力させていただき、私は市の担当として関わった。レジデンスには、年齢も性別も様々な10人の造形作家（ヨーロッパ5人、日本5人）が参加。制作と視察、地域交流プログラム（ワークショップ、シンポジウム、コンサート等）を10日間で行なう、ハードだが充実した内容だ。

アーティストは初日から集中し、制作はスムーズに進んだ。結果として平均5〜6品も制作し、彼らの集中力と作家魂に感服した。

海外作家は全員、日本初滞在だったので、見るもの、聞くもの、食べるものなんでも新しい刺激となっただろう。お弁当箱や小皿料理に繊細な日本文化を感じたフランチエスカ（ドイツ）の作品には、お弁当を大画面いっぱい描く発想のユニークさとともに、デザインや色面構成といった造形要素の追求がみられる。

「いつもは色彩を使わないのよ。アーティスト同士、刺激を受けながら制作するのが自分にとっても発見が多く楽しい」とは、市内見学で撮影した写真を立体コラージュ作品に仕上げた阿部尊美さんの言葉だ。色彩豊かな切り絵のミハエルさん（ドイツ）と同室だった。地域や人との出会いを通じていつもより勢いや実験性に富んだ作品が生まれることは滞在制作の醍醐味だろう。

彼らは、普及・交流のプログラムにも積極的だった。ワークショップでは、雨の中たくさん子ども達がTシャツや壁画を制作し、アーティストと和気藹々のムードで楽しんでいた。参加者にはよい思い出になり、芸術に身近に触れるよい機会を提供していただいたと思う。今回初となるシンポジウムは、レジデンスの感想や、作品のコンセプトなどをアーティスト自身から聞くことができる意義深い企画だった。作品への理解も深まり、さらに、みなそれぞれ「小田原」を作品に反映すべく一生懸命取り組んでくださったことが伝わり、非常に有難く感じた。

素晴らしいアーティスト達と、須藤ご夫妻を始めとする実行委員会メンバーの細やかな愛情と配慮に支えられたARIO2は、小ぶりだがしっかりした実を結んだ。

点描

こんな話でよかったです (22) 仙仁司

社会とアーティスト

第2回 ARIO (10/16 ~ 25) は主会場を小田原城から尊徳記念館に移して開催された。海外作家5名、国内作家5名が招待され、公開制作、ワークショップ、シンポジウム、ツアー旅行などに参加しながら鋭い観察の眼を向け続け、様々な発見の成果を織り成すようにイーゼルにむかい合った。

全員が初来日であった海外作家は好奇の眼を執拗に発揮し、私達の眼が日常生活の中で常態化してもう気付かなくなったような些細な物にまで美としての日本の心を見つけ出すと、国内組の作家は影響を受け、当面の制作の場となった小田原の歴史と自然を掘り起こし、今そこに居る時間を確かめるように作品を生み出した。

会期中に設定されたシンポジウムには小中学生までが出席する中で、公開制作の場ではもう一歩踏み込めなかった個々の造形意識の細部まで理解することが出来た。参加作家と出席者の距離が一気に詰まり、アーティストインレジデンスの意図するところが開かれた。これまで何処がどうだか分からなかったアーティストの社会における位置関係がよく身近にあることが見えてきた。

アーティストの意識や感覚は美として社会の重要な財産そのものに他ならない。現代のアーティストは権威と宗教と妄想から解放され市民社会の中で歩み出し重要な大役を担うようになった。アーティストインレジデンスは最早現代社会の必需品なのだ。ねッ！

震災と美術館

平塚市美術館 学芸員 勝山滋

東日本大震災での美術館の被災は複合的で、過去の震災と違うのは地震に加え津波、原発の影響が重なったことである。

石巻文化センターは、津波で一階が壊滅的な被害にあった。扉がぐにやぐにやになり、蔵書はパルプ分が溶けて地面にたまっていた。津波被害では、塩水に浸かった建築は何度拭いても塩分が染みだしてくるという。二階が無傷でも建物が使い物にならず、先ごろ取り壊された。救出した資料も津波による塩害被害への対処法はこれからという状態である。今回放射能で立ち入り制限になっている地域での救出作業も始まったが、地域コミュニティーあつての文化財と考えるなら、今後救出される資料の存在意義はどこにあるのだろう。

美術行政の問題もある。仙台の福島美術館は伊達家の文化財を収蔵する小規模館である。震度6の揺れに耐えたが、建物に亀裂が入り休館。県には報告したが、翌年ある会合の資料には被害の欄が空欄になっており学芸員は愕然としたという。博物館的な美術館、博物館にある美術品は救援対象になりにくいというが、小さな美術館には支援はおろか、報告すら届かないのか、市街地に立地しながら孤立無援だったと聞き憤りを感じた。寄付金に対しおめでたい図柄の絵はがきを贈るなどの試みが紙上に取り上げられ逆境をバネに再開館できたことに心からの祝意を表したい。

逆に、津波被害をうけた陸前高田市では、山を越えた一関市博物館に救援を要請したところ、翌日には学芸員が現地入りしたという事例もある。同館の責任者は岩手県内の館の横の連携をはかる中心にいた人物で、救援を即断できたことは素晴らしいことである。ある報告会で国の立場の責任者は、国が救援にいった時にはすでに地元が救援活動をしてきたと自戒し、今後いかに行政として動くべきかと問題提起をした。一方現状では、各県内の横の連携構築に温度差もある。国、自治体、民間いずれかが機能しないと救援は遅くなる。つまり、それだけ貴重な文化財が失われる危険が高くなる。美術館人として、いまからできることを模索したいと考えている。

新春コレクション展

Part1 1月7日(火) ~ 19日(日)
Part2 1月28日(火) ~ 2月9日(日)
11:00 ~ 19:00 (最終日 ~ 17:00) 月曜休館

菅創吉、大沢昌助、小山田二郎などの作品から、「若き画家たちからのメッセージ展」の受賞買上げ作品まで、2回に分けて展示します。

マルティンファウゼル Martin Fausel 展

2月18日(火) ~ 3月2日(日)
11:00 ~ 19:00 (最終日 ~ 17:00) 月曜休館

ドイツの小さな村ヴィルヘルムスドルフ在住の作家で、すどう美術館では3回目の個展となります。アクリル絵具をほぼ透明に見えるほど薄くとき、数十回、時には百回も塗り重ね、深みのある色彩で描かれた作品です。

すどう美術館友の会

AQUA クラブ入会のご案内

入会随時

年会費

一般会員 3,000 円

特別会員 10,000 円

法人会員 50,000 円

納入方法 入会随時

ご来館時または郵便振込みでお願いします

・郵便振込み No.00270-7-97439

・加入者名 すどう美術館友の会 「AQUA クラブ」

展覧会 info



続々 世界一小さい美術館ものがたり

イタリアの場合

ミラノに在住し、イタリア、日本だけでなく広く世界で活躍している画家の松山修平さんは、日本に来られると、いつもすどう美術館に寄ってくださる。そして、しばらく美術についての情報交換をする。本年も来館されたが、その時の話の中で「イタリアは経済事情が深刻なようですが、美術の状況はいかがですか」と聞くと、「そんなことに関係なく絵だけはみんな買っていますよ」というのである。人生を豊に過ごすのにアートが必要というのを自然に身につけていくからであろう。松山さんの続きの話で、イタリア人はどんな環境でも、必ず夏には長いパカンスを取って楽しむのだという。それは、その楽識があるからなのだ。その強い意

たまたま、同じころイタリア在住の塩野七生さんのエッセイを読んでいたら、関連して興味深いことが書いてあった。日本では会った人へのあいさつで、「お忙しいですか」と声をかけることが多いが、「働き好きの日本人は幸いにして、という意味を込めて「おかげさまで」と答える。それに対して、イタリア人だったら「不幸にして」と答えれば忙しい中での幸せがあるかもしれないが、少し、余裕をもって生きるということが必要ではないかと、自分のことを省みながら思っている。ついでに「忙しい」といっているが、心も忙しかたで、忙しさを「忙しいです」といってしまいが、このごろは「充実しています」ということになっている。須藤一郎

手紙や電話、メール、LINEなど、色々な手段で、
「すどう美術館友の会」の会費を申し込める。早業
だいたい10月の中旬まで、早業
の申し込みは、受付中。
お申し込みは、受付中。

編集後記

新年そうぞうです。が・・・、「人は死ぬ」と言うこと。わかりきっていることだが、人は必ず死ぬのだと言うことを自覚しているのとしないのでは生き方が違ってくると思う。どう違うのかは説明しにくい。人間として魅力的な人、キラリと光るものを持っている人がきつとそうなるのだろうか。

昨年12月8日の叔母が突然動けなくなりました。介護の現場、医療の現場のすさまじさに直面し、まさに高齢化社会の現実も知らされた。生き方と死に方どちらも同じことなのだと感じました。今年もよろしくお祈ります。須藤一郎